障害のある人を対象としたオープン・カレッジの実施

― オープン・カレッジ in 美作大学・きんちゃい みまさかれっじ ―

薬師寺明子・おかやま発達障害者支援センター（オープン・カレッジ in 美作大学のみ）

Ⅰ. はじめに

1. オープン・カレッジとは

2020 年度（令和 2 年度）文部科学省の学校基本調査（確定値）によると、大学進学率は 54.9％に達し過去最高を記録している。短期大学と専門学校を含む高等教育機関への進学率は 83.8％で、こちらも過去最高だった。高校を卒業後に 8 割を超える人が高等教育機関に進学していることになる [1)]。また、多くの人が市民講座やカルチャーセンター、老人大学等で生涯学習、生涯教育等として学ぶ機会を得ている。しかし、知的障害のある人の場合は特別支援学校卒業後、大学等の高等教育を受ける機会がないのが現状である。

2014 年に障害者権利条約に批准し、2016 年には差別解消法も施行等から、共生社会の実現に向けた取り組みの推進が必要である。学習機会の少ない知的障害のある人への学習機会の提供は、教育の権利保障、教育機会の均等のためにも必要なものである。

学習機会の少ない知的障害者を大学に招き、講義を受けてもらうという取り組みのことをオープン・カレッジという。オープン・カレッジは 1995 年、東京学芸大学において、大学教員や付属養護学校（現在は特別支援学校）、多摩地域の養護学校教員の教員等で構成している「養護学校進路指導研究会」が、特別支援学校を卒業した知的障害のある人を対象に大学公開講座「自分を知り、社会を学ぶ」を開講したのが始まりである。1998 年に大阪府立大学安藤研究室がオープン・カレッジとして活動を始め、活動に賛同した大学関係者を中心に広がりを見せ、1999 年度には武庫川女子大学、2000 年度には桃山学院大学が開講した。その後、宮城大、徳島大等でも開講し全国的に広がった [2)3)]。近県では、島根大学が 2007 年に学生らが中心となりオープンカレッジ実行委員会を立ち上げ、2008 年 10 月から2年を1期とする「知的に障害のある人のオープンカレッジ in 松江」（毎年度秋・春2日間ずつ開講）を開講している [4)]。しかし、近年は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、実施できていない大学も多く、島根大学でも開講は控えている。

オープン・カレッジには三つの理念①知的障害者の人権（教育を受ける権利）の保障、②知的障害者の変化（発達）の可能性の保障、③地域社会に対する大学の貢献がある。オープン・カレッジは知的障害のある人に、ただ学ぶ場を提供するだけではなく、「教育権」や「発達保障」について実践を通して実現しようとする取り組みである。

2. 本報告について

本報告は、発達障害者支援センターと協働で実施している、発達障害のある高校生を対象とした就労準備支援「オープン・カレッジ in 美作大学」及び、学生が実施主体となって実施している知的障害のある人を対象としたオープン・カレッジ「きんちゃい みまさかれっじ」についての実践内容である。

Ⅱ. オープン・カレッジ in 美作大学

1. 実施背景

近年、普通高校に進学した知的障害を伴わない発達障害のある生徒の教育上の支援、特に進路選択支援については、多くの課題がある。おかやま発達障害者支援センター県北支所（以下;支援センター）においても、普通高校等に在籍する生徒からの相談が、多く寄せられている。当事者の「自己理解」や家族の理解が進路選択にお

いては必要であるが、その理解を進めていく上で困難さがあるようである。

そこで、この現状の課題解決にむけ、2013 年度から支援センターと薬師寺研究室が協働し、発達障害のある人を対象としたオープン・カレッジを企画・実施している。なお、2013 年度は試行的な実施、実践報告として地域生活科学研究所を主催とするシンポジウムを実施しすることで、地域に活動を公開し、2014 年度より本格的な実施となった。2015 年度より、地域生活科学研究所からの助成を得て毎年実施している。また、2017 年度より、大学内での実施だけではなく、高等学校に出向いて「出前講座」を実施しているが、昨年度は実施できていない。

2. 実施内容

2020 年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、通常 2 日間の開催であるが、感染状況が落ち着いた頃に 1 日だけで実施したが、2021 年度は通常通りの前期期間中に通常通り 2 日間の開催日程で実施することができた。ただ、1 日目については、大学が新型コロナワクチンの職域接種会場となり、使用教室や学生サポーター、学生スタッフが通常通りの動きができない等、難しい面もあったが、大学側からの配慮や協力のおかげで、実施することができた。

1)企画:筆者及び支援センタースタッフ

2)実施日:2021 年 7 月 10 日(土) ・7 月 17 日(土)

3)実践者:

①全体の運営:筆者及び支援センタースタッフ

②参加者へのサポーター及びスタッフ:薬師寺研究室ゼミ生(3 年生 6 名・4 年生 6 名)。

③講義の際の講師:有資格の大学教員及び大学職員

④模擬作業:大学附属図書館職員・事務作業提供

4)参加者:普通高校に通う発達障害のある人で、就労にむけた準備に意欲があり、学校に安定して通うことができている状態にある 9 名。参加にあたっては、所属校の担任、特別支援教育コーディネーター、相談室の教諭が、参加者・保護者と相談の上、申し込む形式をとった。①参加者・保護者にプログラム概要の説明、②保護者や所属校の担任等から参加者の配慮点の聞き取り、③参加者同士のグルーピングの検討、④参加者と学生サポーターのマッチング等を目的に、支援センターが所属校への事前訪問を実施した。

5)倫理的配慮:プログラムの評価研究に関する参加者への同意および個人情報の記載等については、事前訪問時に参加者に説明を行い、書面にて同意を得た。

3. 実施の流れ

1)プログラム実施前:支援センターが参加者の所属校に事前訪問を行い、得られた配慮点等の情報をもとに運営スタッフ全員で企画会議にて共有。

2)プログラム期間: 1 クール 2 日間。土曜日を利用し、1 回 5 時間程度(表 1)。

表1 スケジュール

1日目	2日目
オリエンテーション (15分)	
講義Ⅰ (45分) (アンケート記入含む)	講義Ⅱ (45分) (アンケート記入含む)
休 憩 (10分)	休 憩 (10分)
マナー講座Ⅰ (20分)	マナー講座Ⅱ (20分)
グループワーク (30分) (アンケート記入含む)	グループワーク (30分) (アンケート記入含む)
昼休憩 (60分)	昼休憩 (60分)
模擬作業Ⅰ (90分) (1日目と2日目でグループを入れ替える)	模擬作業Ⅱ (90分) (1日目と2日目でグループを入れ替える)
グループワーク (30分) (アンケート記入含む)	グループワーク (30分) (アンケート記入含む)
	全体の振り返り (15分) (アンケート記入含む) 修了証書授与

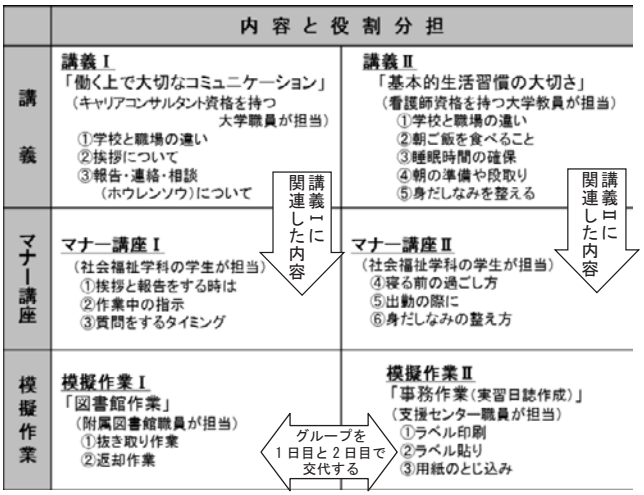

図1 プログラムの内容と役割分担

3)プログラム内容:「働くことを知る・学ぶ」をテーマとして、①講義、②マナー講座、③模擬作業を実施(図 1)。それぞれの内容を振り返るため、実施直後にアンケート記入し、それらをもとにグループワークを実施した。プログラム終了後は、当日参加したスタッフで事後ミーティングを実施。

4)参加者及び支援者の動き:グループワークや模擬作業は 2 グループに分け、模擬作業は「事務作業」と「図書館作業」があり、1 日目と 2 日目で作業を変えて実施した。グループ分けは参加者の個性を配慮した。参加者への直接的な支援者として、学生が「学生サポーター」としてペアでプログラム全体を通して、参加者が困った時や分からない時のサポート役として配置した。また、サポーター以外の学生は「学生スタッフ」として、実施中の準備や片づけ、模擬作業の際の見守り等を行った。

写真１　講義「働く上で大切なコミュニケーション」

写真２　講義「基本的生活習慣の大切さ」

写真３　マナー講座①

写真４　マナー講座②

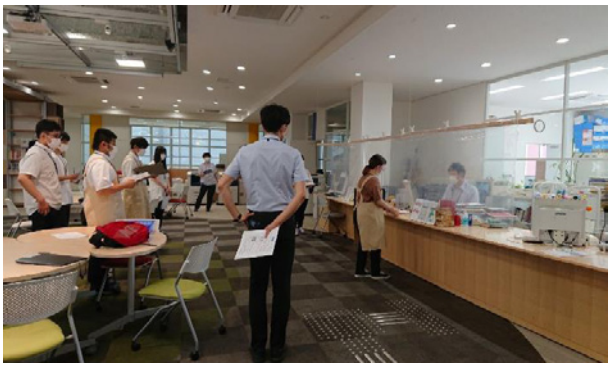

写真５　模擬作業　図書館①

写真６　模擬作業　図書館②

写真７　模擬作業　事務①

写真８　模擬作業　事務②

写真９　模擬作業　事務③

写真１０　グループワーク①

写真１１　グループワーク②

写真１２　修了式

5)プログラム実施後：支援センターが参加者の所属校を訪問（事後訪問）し、事後面談を行った。保護者、担任、特別支援教育コーディネーター、相談室教諭等に可能な範囲で同席してもらい、参加者にプログラムの感想等を聞き取った。また、プログラムを通して得られた今後の就労準備に関して、家庭生活や学校生活（学外実習等）で取り組めそうな点について提案。後日、総括としてスタッフ（学生除く）で反省会を実施した。

３．実施結果及びまとめと今後の課題

本年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響はあったものの、「オープン・カレッジ in 美作大学」を通常通り 2 日間実施することができた。昨年度は参加者も少なく、1 日だけの開催となったことが影響したのか、9 名もの参加があった。昨年は 1 日だけのイレギュラーな開催であったため、学生スタッフや学生サポーターの経験不足から、難しいこともあった。また、両日とも通常は参加者への支援等に関して振り返りの時間を設けていたが 1 日目はその時間がとれなかったため、2 日目は学生の不安感を残したままの実施となったのは、残念だった。新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、完全に通常の動きはとれなかったものの、参加者が大学で学ぶこと、意識しながらの模擬授業の経験、学生との関りは、通常の高校生活では得られない経験であり、参加者にとって、得られたことは多くあったようである。学生や支援者がいることで、安心して参加でき、そこで

の成功体験を得て、就労イメージや自己理解をいくらか得られることで、今後の進路選択の手がかりを得られたのではないだろうか。

学生サポーターや学生スタッフとして参加してくれているゼミ学生にとっても、支援が必要な高校生と関わる経験や支援を振り返る体験できる。

Ⅲ．きんちゃい みまさかれっじ

１．実施背景

2014 年度 3 年生のゼミ生がオープン・カレッジを企画し、2015 年度から「学習機会の少ない方を大学に招いて講義を受けてもらう。」「大学の講義で得た知識や経験を基に、地域でいきいきとした生活を送ることにつながってほしい。」という目的としてスタートした。

表２　きんちゃい　みまさかれっじ（2015-2020）

2015 年度	前期：1 日目　全体講義「文化人類学」・選択科目「英会話」「音楽」 2 日目　全体講義「料理」交流会 後期：1 日目　「工作」「悪徳商法対策講座～あきらめない～」 2 日目　「科学実験」交流会
2016 年度	前期：1 日目　「パソコン」「マナー講座」 2 日目　「栄養学」「護身術」交流会 後期：1 日目　「和菓子作り」「茶道」 2 日目　「災害学習（消防署見学）交流会
2017 年度	前期：「ストレッチ」「口腔ケア」振り返り 後期：「フラダンス」「経済学」振り返り
2018 年度	前期：「防災学」「工作」振り返り 後期：「歴史学（津山)」「ボッチャ」振り返り
2019 年度	前期：「保健学」「声楽」振り返り 後期：「調理実習」「栄養学」振り返り
2020 年度	前期：「心理学」「コミュニケーション学」 後期：「食品学」「美作大学図書館利用ガイダンス」

２．実施内容

2021 年度 4 年生のゼミ生 6 名、3 年生のゼミ生 6 名が企画、実施した。新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、学内の講師で可能なカリキュラムを設定した。

1）実施日及び科目

前期：2021 年 10 月 16 日（土）

参加者：知的障害のある成人　4 名（新規 1 名）

オリエンテーション・公衆衛生学・家政学（マスクケース作り))・振り返り

①公衆衛生学：講師は美作大学短期大学部若林美佐子氏。

新型コロナウイルス等の感染症から感染を防ぐ方法について、講義、演習で体験的に学ぶ。

②家政学：講師は美作大学の小山京子氏。

演習科目として、マスクケース作りをミシンを使って製作した。

写真１３　公衆衛生学①

写真１４　公衆衛生学②

写真１５　家政学①

写真１６　家政学②

後期：2021 年 10 月 23 日（土）

オリエンテーション・気象学・防災学・振り返り

①気象学：講師は NHK 岡山の気象予報士中島望氏。

気象に関する講義や気象予報士の放送体験等を講義や演習を演習で体験的に学ぶ。

②防災学：講師は NHK 岡山放送局担当部局職員 3 名。

NHK の障害種別ごとに分かりやすく作られている防災コンテンツを実際に使いながら学ぶ。

写真１７　防災学①

写真１８　防災学②

写真１９　防災学③

写真２０　防災学④　（手話通訳者）

写真２１　振り返り

写真２２　最後に記念写真

2）実施結果及びまとめと今後の課題

学生が主体となって、企画、実施しており、実施までに様々な行程がある。講義内容の検討、講師探しと連絡調整、参加者募集の広報活動、講師との打ち合わせや当日資料のルビふり等、多くの準備をして、当日を迎えている。今年度から手話通訳者を導入し、聴覚障害のある人が講義内容の理解が増しており、必要な参加者が受講する時は活用したい。今年度も新型コロナウイルスの影響もあり、実施に不安もあったが、当日の検温や消毒等を行い実施することができた。また、新聞等でこの取り組みを知り、始めて受講した参加者もいた。しかし、なかなか新規の参加者が増えないこともあり、今後の広報活動が課題である。

2015 年度から始めた小さい活動ではあるが、岡山県でのオープン・カレッジは本学だけである。今後も継続できるよう努めていきたい。

３．文部科学省調査

文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課障害者学習支援推進室が実施した「令和 2 年度生涯学習を通じた共生社会の実現に関する調査研究【大学等が開講する主に知的障害者を対象とした生涯学習プログラムに関する調査】」[5)]の調査対象となり、アンケート調査及びヒアリング調査に協力した。調査結果については、今年度、冊子及び HP にて公開された。

参考文献等

１）文部科学省 令和 3 年度学校基本調査（確定値）.
２）建部久美子編（2001）「知的障害者の生涯教育の保障－オープン・カレッジの成立と展開」，明石書店.
３）杉本正・兼松美幸（2010）「実践報告『オープン・カレッジの展開』」，帝塚山大学心理福祉学部紀要.
４）京俊輔・薬師寺明子（2018）「オープンカレッジに取り組む中国地方の大学間交流」，障がい者生涯学習支援研究，第 3 号.
５）文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課障害者学習支援推進室（2022）「令和 2 年度生涯学習を通じた共生社会の実現に関する調査研究【大学等が開講する主に知的障害者を対象とした生涯学習プログラムに関する調査】」